



句集 初仕事 小室登美子

序 田島和生

アカシア	昭和	六十年	～	平成三年
赤とんぼ	平成	四年	～	十年
雪 吊	平成	十一年	～	十五年
風の盆	平成	十六年	～	二十二年
百日紅	平成	二十三年	～	二十八年

あとがき  
家族より

## 序

越中富山の細長い坂の町、八尾は毎年九月一日から三日間、おわら風の盆で賑わう。二つ折の編笠に顔を隠した踊り子たちが哀愁のこもった胡弓と三味の音色に乗ってどこからともなく現れる。女の人たちは浴衣に黒編子の帯を締め、白い諸手を見せながら、しなやかに踊る。

この地に少女時代から暮らし、踊りが大好きという登美子さん。私は二度ほど風の盆を訪れたが、いつも幻想の世界に浸る思いだった。「雉」の大会で登美子さんに無理にお願いして踊っていただいたことも二度、三度。この踊りを見ると、なぜか目頭が熱くなる。登美子さんの後ろについて私たちも踊り、楽しい輪が広がったことを昨日のように思い出す。

どの路地も雪洞ともし風の盆  
編笠の歯の匂ひ立つタバかな  
露けしや胡弓のひびき遠ざかり

本句集に掲載の作品だが、風の盆の情景、匂い、調べ、そこはかとなじ寂しげな雰囲気やさすがによく伝えている。

### 注射器の触れ合ふ音や初仕事

句集の冒頭を飾る作品である。「初仕事」という題名も自ら選ばれる。作品通り、登美子さんは看護婦をされていた。新年早々病院に出勤し、注射器をきちんと整理する光景を「注射器の触れ合ふ音」と具体的に詠み、初仕事の喜びを伝えている。

昭和十八年、四歳のとき、父親は太平洋戦争で戦死した。母親は三人の子（登美子さんと兄、妹）を連れて、富山市から実家のある八尾町に疎開し、苦しい生活に耐えながら暮らす。

登美子さんは、戦地で苦しみ、亡くなった父を思い出したのか、中学生の時から将来は仕事の特に厳しい手術室看護婦になりたいと決心したという。苦学しながら高校を卒業。看護学校に入り、念願の夢を叶える。魚津市の富山労災病院をへて、小矢部市に開設したばかりの北陸中央病院に移る。ここで、念願の手術室看護婦として在職期間三十一年間のほとんどを働くことになる。

彼女にとって幸運だったのは、院長の泊康夫先生が沢木欣一主宰「風」同人で、院内で句会を始め、俳句を勧められたことだった。しかも、先輩の看護婦青木和枝さん、病院勤務の吉田泰子さん、調理担当の山信夫さんも句を作られ、それぞれ後に「風」同人になられた。また、市内の開業医滋野純生氏も「風」同人だった。恵まれた俳句環境の中で、「風」の即物具象と写生を基本に熱心

に俳句に打ち込まれた。

まず、病院関係の作品を取り上げてみたい。

アカシアの花の見えぬ手術室  
鏡餅供へて使ふ消毒器  
入院の患者陶枕抱へ来る  
芋茎の渋に染まりし手より採血す  
消毒の液に近寄る冬の蠅  
包帯を干して見下ろす枯野かな

一句目は手術室の様子。医師が患者の腹部などを開き、メスを振るう。ガラス越しに、甘く匂うアカシアの白い花。ときどき、目をやっつては心を落ちつかせる。二句目。いつも使う消毒器の棚に、手術の成功を願って鏡餅を供える。三句目。暑くて眠れないのか、患者が陶器の枕を抱えてくる。どこか、おかしく、おそろかな病院風景である。四句目。自宅で芋茎の皮をむき、渋に染まつた手で患者の採血をする。少し恥じらいながら……。五句目。寒さに、じっとしていた蠅が、消毒液の入った瓶によろよると近寄る。蜂蜜と間違えたのかもしれないが、哀れである。最後の句は、病院の屋上だろうか。多くの包帯をようやく干し終えて、見下ろせば枯野が広がる。荒涼とした風景と、風になびく白い包帯が目に見えぬ。

次の句は、親しくなった患者のことを詠まれたのかもしれない。

古鍋に仙人掌咲かせ逝きにけり  
ギプスせし手でたんぽぽを摘んでをり  
病み癒えて婆のひたすら豆叩く

一句目。花が好きな長期療養の患者が亡くなった。鉢代わりに使っていた古い鍋に、仙人掌が見事な花を咲かせたというのに……。二句目。女の人が腕を折り、白いギプスの手で、たんぽぽを摘んでいる。まもなく、手も治るのである。たんぽぽが明るい春を告げている。三句目。病気がようやく治った老女の家を訪ねたら、延に坐って豆を叩いている。働き者の老女の姿を鮮やかに捉えた作品である。

登美子さんには、母や夫など家族を詠んだ作品が大変多い。ただ、句集では若い時の作品を割愛しており、母も晩年の姿である。

朴の花峠を越えて母見舞ふ  
臥す母の寝息に合はす団扇かな  
冷奴母のふるへる箸にのる

一句目は、入院中の母親だろうか。この峠を越えれば、病院も近い。峠のあちこちには、朴の白い花。この花のように元気になればと願う。二句目。病臥の母に団扇で風を送る。「寝息に合はず」に母への深い愛情を感じさせる。三句目。やや回復した母は冷奴をおいしそうに食べる。手が震え、箸にようやくのった冷奴も震え、痛ましい姿である。結婚されたのは勤めて三年後である。同じ病院に勤め、優しいレントゲン技師と知り合い、結ばれる。幸せな生活に入り、三人の子にも恵まれる。

夫の友青梅 三升下げ来たる  
雪吊を終へたる夫の見よと言ふ  
雪卸す夫へ携帯電話かな  
縫ひぐるみ枕に夫の昼寝かな  
一服を重ねて夫の緑摘む

夫は友人も多い。「梅干しにしないか」と青梅を三升も下げてきたのに驚き、すかさず俳句に詠む。二句目。庭木の雪吊をした夫が「ちよっと見ないか」と嬉しそうに声をかける。三句目。屋根雪を卸す夫に携帯電話で知らせる。「いはんが出来たわよ」と言ったのかもしれない。四句目。座敷で昼寝をする夫を見れば、枕代わりに、動物の縫いぐるみ。おおらかな夫の姿がおかしい。最後の句。晩春、夫が梯子を立てて、長く伸びた松の新芽を摘んでいる。「ちよつと一服するわ」と言っただけは梯子を下りて、茶菓子をつまむ。どれも夫の姿を生き生きと詠み上げている。

これは、孫の姿だろうか。

真つ黒な手で帰りくる花火の子  
淡雪の晴間に干せる産着かな

近所で花火をしてきた子どもの手を見れば、汚れて真つ黒。驚きながらも健康な姿に安心する。二句目。雪国では冬場の選択に苦労する。ちらちら降っていた春の淡雪が止むのを見て、急いで産着を干す。白い淡雪に白い産着。薄青い空、と色彩も美しい。

四歳のときに戦死した「幻の父」だが、いつも忘れることはない。

遺しある父の写真機 黴匂ふ  
遺骨なき父の手紙や百日紅

遺品の写真機は時代をへて黴が生え、心が痛む。戦地から「とみこさん」宛に届いた手紙も遺る。だが、父の遺骨は還らなかった。二句目。赤く咲いた百日紅を眺め、父の手紙をまた開く。

日常生活での囑目詠は実感もあり、どれも秀逸である。

立ちしまま漫画読みある西瓜売  
雛の髪癖を直して納めけり  
雛の餅炙れば蓬匂ひけり  
雪片を払うて受くる回覧板  
筍の皮剥ぐたびに露こぼれ

それぞれ、説明も要らず、よく判る。一句目。商売はそこそこに漫画を読んでいる西瓜売。二句目の「雛の髪癖を直して」のていねいな詠み。三句目の「蓬匂ひ」の描写。四句目の〈雪片を払うて受くる回覧板〉なども何でもない光景みたいだが、実感があって大変いい。いかにも雪国の生活をほうふつとさせる。最後の〈筍の皮剥ぐたびに露こぼれ〉にしても、良く写生をし、きらきら光る露が目に見えるようである。

次のような涅槃会、地藏会といった祭事の句は、北陸の風土俳句の味わいもあり、じっくり味わいたい。

涅槃会で拾ひし餅を炙りけり  
地藏会の膝につきたる莫塵の跡  
産土神の松の中より寒雀

登美子俳句で、わたしは特に注目したのは、諧謔味豊かな作品が多い点である。それも、わざとらしさがない。読むうちに、笑いが静かにこみあげ、こちらの心を温かく包み込んでくれる。

洗濯機のぞけば蜂も廻りをり  
腕ぎとりし茄子に跳びつく青蛙  
肩に来る鸚哥に咬まれ三日かな

一句目。洗濯機と一緒に廻る小さな蜂も目が廻る。二句目。畑の茄子を擁ぎ取ったら「勝手に取らないで」という風に、茄子に跳びつく青蛙。三句目。鸚哥を肩に乗せて可愛がっていたら、鋭い嘴で顔などを咬みつかれた。鸚哥の愛情の表現かもしれないが、正月三日、えらい災難である。

ユーモラスな作品はまだ、ある。

実のならぬ柚子を毎年雪囲  
振り落すくわりん頭に当りけり  
鏡見て着ぶくれの身を笑ひをり

一句目。「来年こそは」と毎年、柚子に雪囲いをするが、一向に実がならない。それでも、雪囲いをするというおかしさ。そして、優しさ。二句目。黄色く熟した榎櫨を採るため、枝を揺さぶったら、あのごとつごつした硬い実が落ちてきたのは良いが、頭に当たった。さぞや、痛かったに違いない。最後の句もおかしい。大きな鏡の前に立って、自分の姿を見たら、冬の着重ねでますます太って見える。その自分の姿に自ら、笑ってしまった。何とも楽しい登美子俳句である。

早く病気を治して退院され、こんな思いのこもった楽しい俳句をこれからもぜひ作って下さい。そう、書いて拙文を閉じるつもりでした。

小室さんから句集出版の手紙が届いたのは、雛の日の三月三日。亡くなられたのは、その十一日後の十四日朝。あまりにも早いご逝去に言葉もなかった。せめて、近くの倶利伽羅山の桜が咲くころまで元気でいて欲しかった。

倶利伽羅の花をちかぢか逝き給ふ 和生

あなた自身も残念だったに違いない。しかし、この句集はあなたと出会い、あなたを愛した多くの人たちの愛蔵書として長く読み継がれるに違いない。

平成二十九年四月 花曇の日に

田島和生

アカシア 昭和六十年〜平成三年

昭和六十年

注射器の触れ合ふ音や初仕事  
左義長の炎にとける太き文字  
アカシアの花の見えぬる手術室  
鮎を焼く塩飛び散れる炉端かな  
病癒え爺の水やる青葡萄  
猫上がる塀より高く棗の実  
白山の裾野に群れて彼岸花  
鬼子母神裾をいろどる実むらさき  
冬至粥火鉢にかけて針仕事  
雪吊りのゆるびし繩に雀くる

昭和六十一年

左義長の残り火で手を炙りけり  
雪解水雪のトンネルぬける音  
燈籠の菰解き庭に広げ干す  
涅槃会で拾ひし餅を炙りけり  
古鍋に仙人掌咲かせ逝きにけり  
秋うらら麦屋踊の笠さばき  
病床の神父の笑顔小春なり  
娘に紅茶入れてもらつて賀状書く  
新築の家の尺余の氷柱かな

昭和六十二年

鏡餅供へて使ふ消毒器  
咳込みて経のとぎれし尼僧かな  
山茶花の咲き初めし垣通夜明り  
雪囲されし中にて木偶狂言  
少しだけうごく子供の木偶の舞  
春の雪ちらつく峡の木偶まつり  
梅ふふむ窓辺に木偶を寝かしあり  
分校の教師のみやげ太き独活  
朴の花峠を越えて母見舞ふ  
初蟬や吊橋渡り飛驒に入る  
地藏会の膝につきたる莫塵の跡  
コスモスのトンネル抜けて退院す  
またがつて大注連縄を縋ひ上ぐる  
注連作りお神酒をかけて仕上げたる

昭和六十三年

書初や浅瀬を濁し筆洗ふ  
旅を終へまづ座りたる雛の間  
春の泥つけて木材切り出さる  
摩崖仏詣でて食ぶる心太  
真つ黒な手で帰ってくる花火の子  
病床で子の名を書いて星祭  
立ちしまま漫画読みぬる西瓜売  
水ぐるま廻して木曾の残暑かな  
新涼や酒供へある摩崖仏  
秋燕黒部の谷にひるがへり  
金木犀子の誕生日近づきし  
立山の夕映の下粳の山  
利賀村のもみづる野外演舞場  
晦日蕎麦巫女になる子に温めやる

平成元年

潮風を背に父と子の初詣  
中耳炎わづらつてをり三が日  
牧開き一度に仔牛をとび出せり  
露味噌を作りて母を見舞ひけり  
洗濯機のぞけば蜂も廻りをり  
春の蟬奈落の谷へ消えにけり  
散居村引裂くごとくはたた神  
花莫蔭にむくみし足をなでてをり  
薫風に麻痺の手足をさすりたり  
塚の中出口をさがす赤蝮  
雀二羽屋上歩む夏の果  
車椅子冬日の中へ押されゆく  
雪囲されて動かず池の鯉

平成二年

産土神の松の中より寒雀  
鏡見て着ぶくれの身を笑ひをり  
雛の髪癖を直して納めけり  
蟬しぐれ孫にかつがれ柩出づ  
束ね編む菊人形の裏舞台  
満天星の紅葉散り初む窯の跡  
排水溝金木犀の花筏  
振り落すくわりん頭に当りけり  
通草もぎテニスコートで分け合へり  
枯野から続いてをりし能登の海



平成三年

水仙活け骨折の足挙げてをり  
白き息吐いて納骨終へにけり  
恋猫に咬まれし婆の傷癒ゆる  
合歡の風入れて手術の傷癒やす  
帰省子のただひたすらに眠りをり  
五箇山の段々畠胡麻弾く  
みちのくの苞の松茸酒もらふ  
急ぎ買ふあなご弁当冬の旅  
松原に風花の舞ふ雨あま晴はる  
門松を竹匏かけ仕上げをり

赤とんぼ

平成四年〜十年

平成四年

はぜ炭を守りお御籤売つてをり  
青竹のゆらぐ湯の宿女正月  
峡の湯の渡り廊下や露の臺  
陽のあたる小窓をあけて燕待つ  
ギプスせし手でたんぼぼを摘んでをり  
入院の患者陶枕抱へ来る  
肩車されて灯を入れ地藏盆  
竹筒に入れる骨酒里の秋  
ゴルフボール時雨の山へ打ちにけり  
炉明りや友禅染の筆の音

平成五年

どんどの火弾けて腹にひびきけり  
新しき墓や彼岸の雪かむる  
新築の梁の汚れや燕の巢  
どの家も植田の中や散居村  
縮緬の衣裳に汗や子供獅子  
土用鰻買うて畦道渡りくる  
大梧桐眺めて爺の臥してをり  
黄楊の木にかかりてをりし蛇の衣  
芋茎の渋に染まりし手より採血す  
毬栗の転がるままに旧街道

包帯を干して見下ろす枯野かな

平成六年

空港の硝子のドアに注連飾  
半纏の綻び縫へる四日かな  
口に藁ぶら下げて燕くる  
夫の友青梅三升下げ来たる  
五尺余の泰山木に花一つ  
自転車で魚を買ひに青田道  
遺しある父の写真機黴匂ふ  
検診の衝立越ゆる鬼やんま  
梶の葉や回廊湿る諏訪大社  
葉鶏頭折口父子の墓標かな  
金木犀こぼして獅子の舞ひにけり  
病み癒えて婆のひたすら豆叩く  
竜巻に能登のしぐるる句碑開き  
消毒の液に近寄る冬の蠅  
梯子足し義仲像の煤払

平成七年

夭折の友の遺影へ実千両  
雛の餅炙れば蓬匂ひけり  
峡の湯の径行きどまり著莪の花  
臥す母の寢息に合はす団扇かな  
片蔭に鎖ひきずり犬喘ぐ  
庄川の石入れ飼はる罔鮎  
願かけの帰りに拾ふ椿の実  
良夜なり鶏小屋へ狸くる  
雪吊の重しとしたる石の白  
柚子風呂に母の小さき背かな

平成八年

淡雪の晴間に干せる産着かな  
散髪を終へたる母や春の雷  
牧開土蹴り上げて仔牛くる  
教室の窓いつばいに桐の花  
車椅子牡丹に触るる程寄せて  
腰揚げを増やせる母の更衣  
赤まむし皮剥がれても絡みをり  
羽抜鶏予防注射の部屋のぞく  
冷奴母のふるへる箸にのる  
手を広げ赤子の眠り晩夏かな  
夕映やまなこの透きし秋刀魚買ふ

鱈汁の鍋の底より目玉かな  
念仏を唱へて母の柚子湯かな  
病む母の手足拭きやる柚子湯かな  
干鮭の腹の血管透きゐたり

平成九年

浅春や一本長き猫の髭  
寒明の見失ふほど細き月  
卒業子荷物に埋まり帰り来し  
白樺の幹に結はへて鯉幟  
青田道急ぎ花嫁見にゆけり  
金箔を顔に飛ばして秋暑し  
丑の日をさけて大根蒔きにけり  
知床の瀧へとびつく鮭の群  
啄木の一族の墓秋の風  
臥す母に新米の粥含ませぬ  
函館山遊女の塚に秋桜  
はらからの柩にとまる赤とんぼ  
小春日や諸手で抱いて鯉移す  
新巻を北風に向け晒しあり  
山茶花や母の残しし日記読む  
母逝きて庭につつじの返り花  
亡き母の藁沓に足入れてみる

平成十年

雪吊 平成十一年〜十五年

雪搔いて掘り出す蕪雪で拭く  
退院の赤子をねかす雛の部屋  
蒨味噌を母の遺影に供へたり  
筍の皮剥ぐたびに露こぼれ

平成十一年

露天湯に影を走らせ岩つばめ  
水中花泡一粒を葉の裏に  
俱利伽羅や奈落の谷に朴の花  
奥信濃そばやの前に蕎麦の花  
天高し潮もり上がり渦巻けり  
家ごとに提灯下げて年用意

平成十二年

届きたる根元の太き水仙花  
寶石の流るるごとき鮫かな  
店番の犬にチョッキや万愚節  
後退りしつつ近寄る猫の恋  
沢蟹の歩める縄文遺跡かな  
折れ口の白き小枝に鴉の贅

平成十三年

雛人形声かけながら納めたり  
色鳥や稚児の冠傾きし  
萩の雨爪で織り上げ京綴  
万葉の歌天高く朗誦す  
お遍路の友より届くザボンかな  
丹頂の番きてゐる風蓮湖

平成十四年

竹筒の酒振舞はれどんど果つ  
雪吊の縄の解かれて松匂ふ  
持ち上げし枯葉の下に露の臺  
挽ぎとりし茄子に跳びつく青蛙  
古文書を包む羽二重若楓  
産声のひびく窓辺を螢かな  
編笠に茶髪のうなじ風の盆  
秋天のまなこに残る碧さかな  
秋うらら臥床の夫の髭を剃り  
雪吊を終へたる夫の見よと言ふ  
日本語を習ふ新妻小春かな  
俱利伽羅の龍の口より氷柱かな

平成十五年

厄除の餅切り分くる大広間  
玻璃越しに笑ふ赤子や春隣  
薄紙で視線を包み雛納  
奥飛驒の新緑川の底までも  
おはぐろの飛んでは戻る同じ石  
穴まどひ仙人掌くぐり消えにけり

新米の粥をよろこび逝きませり  
ほろ苦き栃の実入りのケーキかな  
豌豆植う真綿の如く土かぶせ  
輪切りせし人參の芯みどりなり  
花道へ出番待つ子の嚏かな  
冬晴や真下に富士の火口見て  
碑の文字に吹雪の雪詰まる

### 風の盆

平成十六年〜二十二年

自己流の具を盛り上げて雑煮かな  
初句会母の遺愛の袖着て  
春雷や馬車ひく馬の後退り  
熊出没注意ビールのラベルにも  
蚊帳吊つて蚊帳たたむこと教へけり  
巫女舞の稽古の膝へばった飛ぶ  
星飛ぶや明日進水の丸木舟  
色鳥の一羽止まれば一羽去り

平成十七年

雪片を払うて受くる回覧板  
ちぎり絵のごとき浮雲仏生会  
越中と飛驒結ぶ橋初つばめ  
混む電車扇子の風を分け合へり  
すだく虫耳につくまま眠りけり  
爽やかや凶鑑通りの仔犬来る  
翳雲籠に赤子の眠りをり  
思案重ね稲刈の日を決めにけり  
飛驒越中隔つる谷や夕紅葉  
実のならぬ袖子を毎年雪囲  
寸劇の役者の抱へ大大根  
亡き父の文を読み終へ煤払

平成十八年

肩に来る鸚哥に咬まれ三日かな  
白き灰のせて豌豆芽吹きをり

一家族鸚哥を連れて帰省せり  
深鍋にカレーを煮込む晩夏かな  
名月を白寿の婆と眺めけり  
縁側に明り窓つけ雪囲  
雪降りて近づけぬ墓拝みけり  
雪卸す夫へ携帯電話かな  
六地藏顔だけ見ゆる深雪かな  
百歳の媼や雪の誕生日

平成十九年

裸衆出初の手押ポンプ押す  
小正月生れしばかりの子を抱いて  
指に触れたうもろこしの花粉とぶ  
病室に蘭草の枕匂ひけり  
縫ひぐるみ枕に夫の昼寝かな  
鉄棒に上がる子見る子天高し  
献血車来てゐる広場小鳥来る  
万葉の歌碑に侍りて女郎花  
身ごもりの子の爪立ちて梨を挽ぐ  
鰯捌く魚屋の妻尾を押へ

平成二十年

尼さまの頭上騒がせ嫁が君  
凍つる磴筵を敷いて涅槃寺  
涅槃会の案内板掛け仁王門  
雪除けて団子蒸す竈据ゑにけり  
涅槃団子捏ねゐる尼の眉に粉  
丸菓をまるめるごとく涅槃団子  
涅槃団子のコバルトブルーの空澄めり  
釜蒸籠洗ひ終へたり涅槃西風  
閻魔堂裏へ狐の親子出づ  
厩出しを待ちゐる牛の目と合へり  
散居村一望にして初音かな  
山吹やスイッチバックの電車来る  
若葉風首のすわりし赤子抱く  
亡き父の戦地の文や紙魚走る  
焙煎のコーヒー匂ふ晩夏かな  
湯疲れに柚子羊羹と渋茶かな  
五箇山の杉葉を添へて滑子壳  
初夢の熊と出合ひて目覚むかな

平成二十一年

舟うらら手提籠より仔犬出づ  
初燕峡の湯けむりふはふはと  
尼寺や竹の子飯のてんこ盛り  
植ゑし田に新幹線の工事音  
夏至の日や紅花入りの熱湯して  
大毛虫葉にへばりつき流れ来る  
団栗をぼりぼり噛んで鹿寄り来  
桃色の玩具のスコップ雪飛ばす

平成二十二年

辻占はすゑひろと出て女正月  
大寒や改札口を鳩歩む  
涅槃図の虎は口あけ嘆くかな  
愛犬の逝きし八十八夜かな  
桃色の新芽出でたり古代蓮  
住職の法被姿の山車を曳く  
薫風の通ふ御堂や御剃刀  
くちなはの水面を打って地に上がる  
町裏に鮎の群れある流れかな  
唄ひ手の喉鍛へをりあいの風  
編笠の藺の匂ひ立つ夕べかな  
爽やかな風のごとくに胡弓の音  
どの路地も雪洞ともし風の盆  
石畳足裏で叩き踊りをり  
黒繻子の帯の踊子しなやかに  
飛入りの形のちがふ踊かな  
ひとしぐさ遅れ幼子踊りけり  
風の盆地方は笠を背に垂らし  
露けしや胡弓のひびき遠ざかり  
立山の日の出に踊り果てにけり  
返り花付けて林檎の力技  
手袋を外し師の句碑撫でにけり

百日紅 平成二十三年〜二十八年

結納の膳の伊勢えび動き出す

平成二十三年

立春や新調したる割烹着  
坊守の露味噌とろりあさみどり  
一服を重ねて夫の緑摘む  
笹百合の蕾供ふる忿怒仏  
片仮名の戦死の父の文曝す  
遺骨なき父の手紙や百日紅  
旅立ちの駅や老鶯しきりなり  
谷底の碧き流れや蟬しぐれ  
登山客一人のトロツコ電車かな  
青胡桃駅舎の窓に触れぬたり  
雨雲の吹き払はれて朴の花  
藤の実の青きの雨の残りをり  
地藏会へ帯かけ背負ふ地藏さま  
インディアン水車でふ築鮭跳ぬる  
母の忌の弦月に暈かかりけり

平成二十四年

餅花を挿しある安芸の飯屋かな  
身を屈め蠟梅の香に近づけり  
誘はれて夫のそはそは植木市  
彼岸潮引きて橋脚黒ずめり  
病む夫の髭剃る八十八夜かな  
野球帽地下足袋の夫松手入  
干し柿を盛る高麗の漆器かな  
金箔を移す竹篋片しぐれ  
菰巻かれ前うしろなき地藏さま  
放射能測る園庭冬の鴟

平成二十五年

能登訛ひよいと出す夫夏きざす  
木洩れ日に風鈴の舌光りたり  
薔薇の葉にしがみつき鳴く油蟬  
風の盆醬の匂ふ坂の町  
みちのくや脚一本の稲のには  
柚子を挽ぎ軍手に残る香りかな  
挿木せし椿に小さき雪囲  
雑巾をミシン縫ひして年用意  
生き物の転がるごとく地吹雪す

平成二十六年

卒園児涙ふきふき歌ひけり  
こはごはと乳を搾る子牧開  
光背は化仏千体風涼し



肝煎の屋敷の中の青田かな  
奥能登や魚汁のかかる冷奴  
ギヤマンの猪口に五箇山地酒かな  
いかづちのひつきりなしの夜伽かな  
身に沁むや廃校に鳴る時計台  
鴟晴や峡の霊水ほとばしり  
葉牡丹の苗の葉脈粗きかな  
玉霰笈となりてくねり行く  
年の市檜の匂ふ蒸籠買ふ

平成二十七年

結納の宝船燃えどんど果つ  
古雛の冠留むる小町針  
俱利伽羅や草刈り伏する結ゆひの衆  
流れくる唱歌の時報今朝の秋  
尼寺へ渡る小橋や鴟高音  
播鉢は年代物やとろろ汁  
日溜りや群る綿虫筒状に

平成二十八年

義仲の願文薄れ淑気満つ  
家族皆みくじ吉なり初笑  
表具屋へ届く初荷の手漉和紙  
白山の頬刺す風や糊を炊く  
深雪晴大釜据うる竈かな  
釜のへり糊こんもりと湯気を吹く  
古糊はチーズの匂ひ風花す  
春雷や七年醸す甕の糊  
涅槃図を納むる木箱セピア色  
能登島の汀に生るる春の虹  
きときとの春鰯買ふ氷見の浜  
潮干狩足裏くすぐり潮引けり  
鳴き砂を飽きずに踏む子春の旅  
入相の水田へ落花しきりなり  
家持の歌碑へ紫華鬘かな  
回向柱読めぬ梵字や緑さす  
検診の赤子すやすや夏帽子  
五箇山や炉明りにのみ葉草茶

## あとがき

昭和十四年十一月一日、富山市に生まれました。

四歳の時、父が戦死し、その後強制疎開となり、富山市から両親の実家がある八尾町に引っ越しました。越中おわら風の盆が大好きで、よく踊りました。

母は親戚の援助を受けながら、私たち兄妹三人を女手ひとつで育ててくれました。中学生の頃、手術室の看護婦を目指すことを決め、奨学金を借りて、アルバイトをしながら何とか高校を卒業し、目標通り看護学校に進学し、看護婦になりました。

卒業後、富山労災病院に就職。三年後、結婚を機に北陸中央病院に移り、手術室に配属されました。病棟勤務を合わせ、二十八年間お世話になりました。在職中、北陸中央病院の泊先生から俳句を勧められるまま会員になりました。

「また、俳句の右も左もわからない頃に、「風」同人の滋野純生先生のお世話で、小矢部に立ち寄られた沢木欣一先生に初めてお目にかかりました。埴生にある料亭旅館にて句会が行われ、その時詠んだ句が、

籠そばに竹の子握る手泥まみれ

沢木先生に選句していただき、大変光栄に思いました。

又、病院の慰安旅行で下呂温泉を訪れた際、広島鉄道病院の林徹先生御一行と偶然一緒になり、合同句会が行われました。これが林徹先生との最初の出会いです。こうした先輩方との出会いが一生の宝物になりました。

退職後、年老いた母の最期を自宅で看取ることができ、やっと親孝行ができたように思えました。

その後、ボランティア活動に力を入れ、小矢部市連合婦人会会長として、「美しい地球を次世代に」を合言葉に、地球環境問題に取り組みました。ダイオキシンの排出の原因となっていたスーパーのレジ袋を減少させるため、マイバッグ持参を呼びかけました。

泊先生から「そろそろ俳句に力を」とお言葉を頂いたのを機に俳句に貢献を誓いました。以来、たくさん仲間と共に俳句を楽しませて頂きました。光栄にも主宰より句集のお話を頂きました。

大病を患い、ここは一気に生まれ変わったつもりで句集を出版することになりました。昭和六十年から平成二十八年までに発表したものの中から五百四十七句を自選し、主宰から三百七十一句を選んで頂きました。

私の一番好きな句、

注射器の触れ合ふ音や初仕事

より句集名『初仕事』と決めました。

田島和生主宰には、ご繁忙の中選句をしてくださり、またご丁寧な序文まで

ご執筆頂き、深く感謝申し上げます。

これまでの七十七年間、いろいろな面でお世話になった方々に感謝を込めてこの句集を贈ります。読んで頂ければ幸いです。

出版にあたり「文學の森」の皆様ほか、句集発行に携わって頂いた皆様、いろいろご指導易り心より厚くお礼を申し上げます。

平成二十九年三月

小室登美子

## 家族より

病が再発し、命の限界を伝えられた時、母は目に涙を溜めて震えていましたが、気丈に振る舞っていました。

心の整理がついた後、「本当は句集出したかったがいちゃ」と思いを告げました。

「句集を完成させる」という生きがいを得て、座っていることも辛かったであろう母が、一時帰宅し、選句や「あとがき」、題名等を私たちと一緒に取り組みました。

「ばあちゃんの髪を切ってあげたこと」や「孫が生まれた時のこと」等、昔を懐かしみながら選句しておりました。

母には親孝行らしいことを何一つしていませんでしたが、句集を作成する共同作業は短い時間とはいえ、母の思いに添える何よりも親孝行になったのではと思っております。

母は最期まで、強い生き様を私たちにみせてくれました。無念にも句集の完成を待たずに母は去ってしまいました。

「あとがき」は、母がいつか句集を出す時のために書き留めていたものを私たちと一緒にまとめたもので、そのまま記載いたしました。序文と重なるところがあります。何卒ご了承ください。

出版にあたり、田島和生先生を始め、「文學の森」編集者の皆様、句集発行に携わって頂いた皆様から、ご指導を賜り心より厚くお礼を申し上げます。

平成二十九年五月

家族一同

著者略歴



小室 登美子 (こむろ・とみこ)

著者 小室登美子

昭和十四年十一月一日 富山市生まれ

昭和三十六年 金沢大学医学部附属看護学校卒業

富山労災病院勤務

昭和三十九年 公立学校共済組合北陸中央病院勤務

昭和五十六年 「風」入会 沢木欣一に師事

平成 六十年 「雉」入会 林徹に師事

平成 四年 同病院退職

平成 十七年 「雉」新人賞受賞

「雉」同人

平成 二十年 「雉」継承主宰 田島和生に師事

俳人協会会員

富山県俳句連盟会員

発行 平成二十九年 八月 三日

発行所 株式会社 文學の森

ISBN978-4-86438-662-3 C0092